

# フランスにおける戦後日本写真の振興に企業メセナの果たした役割 ―「大日本印刷寄贈コレクション」の事例から

小島ひろみ

- 0. はじめに
- 1. MEP とは
- 2.1 DNP の文化活動
- 2.2 大日本印刷寄贈コレクション
- 2.3 同コレクションリスト
- 3. MEP における同コレクションの展開
- 4. おわりに
- 参考図版
- 別紙 1
- 別紙 2
- 参考文献

## 0. はじめに

2017 年、パリのヨーロッパ写真美術館（以下「MEP」）にて「記憶と光 日本の写真 1950-2000 大日本印刷寄贈コレクションより」（展覧会情報：下記）と題された展覧会が開催された。内容は、戦後から現在に至るまでの日本写真の歴史を網羅するものであり、日本を代表する写真家の 1945 年から 2000 年までの作品が、これほど包括的かつ総合的にパリで公開されるのはほぼ初めてのことである。

美術史の文脈での写真作品の評価において、フランスはアメリカと並び高い水準を誇る国である。アメリカがニューヨーク近代美術館(MoMA)を中心にマーケットも含めた写真表現と市場の活性化を牽引する中で、フランスは国家政策として写真分野に取り組み、国内のみならず、国外の写真の収集・研究・展示活動が幅広く展開されてきた。日本写真も例外ではなく、フランスにおける体系的な日本写真のコレクション形成が行われた。それが、1994 年から 2006 年にかけて大日本印刷株式会社（以下「DNP」）がヨーロッパ写真館（現：ヨーロッパ写真美術館）に対して 11 回にわたり行った「DNP 寄贈コレクション」であり、寄贈作品は 21 作家・540 点にのぼる。上記の展覧会は、MEP がそれらの作品の中から約 350 作品をセレクトし、特別展として企画・開催したものである。

このコレクションは写真史的な観点からも非常に質の高い所蔵品群を形成しており、現在でも MEP において重要なコレクションとしての存在を確立している。美術館や公的な研究機関ではなく、民間のメセナ活動が国外の写真界においてこれほど大きな役割を果たしたことも特筆すべき点であるが、この功績は日本国内においてさえもほとんど認知されていない。日本の

戦後写真が国外においてどのように認知され評価がなされてきたのか、企業メセナがそれに大きく貢献した一例として、経緯や意義を考察しながらそれらの功績を再認識する機会とした。

なお、取材先へのインタビューは下記の日程で実施した。

① DNP（大日本印刷株式会社）

2022 年 11 月 7 日（月）大日本印刷株式会社 ICC 本部（銀座）にて。

本部長 新井一輝様、エグゼクティブ 飯田直子様

② ヨーロッパ写真美術館

2022 年 11 月～12 月にかけてメールでのインタビュー。

MEP/ヨーロッパ写真美術館 コレクション部門責任者 パスカル・オーエル氏

また、今回のインタビューにあたり大日本印刷株式会社・飯田様から倉持和江様（本文では敬称略）にこのプロジェクトについての詳細を直接ヒアリングいただき、当時の貴重な文献や資料を閲覧させていただきました。MEP へのインタビューに関しては、新井様と飯田様に的確なご助言お力添えいただきましたこと、あわせて心から感謝申し上げます。

■ 2017 年展覧会概要

タイトル：*MÉMOIRE ET LUMIÈRE PHOTOGRAPHIE JAPONAISE, 1950-2000 LA DONATION DAI NIPPON PRINTING CO.,LTD.*

記憶と光 日本の写真 1950-2000 大日本印刷寄贈コレクション

会期：2017 年 6 月 28 日（水）～8 月 27 日（日）

会場：パリ市立ヨーロッパ写真美術館 Maison Européenne de la Photographie

〔出品作家〕 荒木経惟、深瀬昌久、古屋誠一、畠山直哉、HIRO、細江英公、石元泰博、石内都、木村伊兵衛、松江泰治、宮本隆司、森村泰昌、森山大道、奈良原一高、柴田敏雄、杉本博司、田原桂一、土田ヒロミ、東松照明、植田正治、山崎博

1. MEP／ヨーロッパ写真美術館

まず MEP について説明をしておきたい。MEP とはヨーロッパ写真美術館(Maison Européenne de la Photographie)の頭文字（以下 MEP と記載）からの通称で、1996 年 2 月パリ 4 区にオープンした写真専門の美術館である。「パリ・オーディオヴィジュアル(Paris Audiovisuel)」(後述)という協会が母体であり、パリ市が資金面を支援、市は美術館の建築である「Hôtel du Président Hénault（オテル・ドゥ・プレジダン・エノー）」の提供もしている。

MEP のコレクションは、1950 年代から現代までの国際的な各時代を代表する写真・映像作品から成っている。写真作品 24,000 点（銀塩・デジタルともに）、アーティストビデオ 110 点、ドキュメンタリーフィルム 800 点、印刷物 36,000 点からなり、ルポルタージュからアート、ファッション写真、現代のドキュメンタリーまで、映像メディアにおける多様なアプローチをコレクションに反映させている。また写真集をはじめ、技術書、理論書など、写真に関する参考文献も数多く収蔵しており、中には貴重なエディションも多数含まれる。20 世紀後半から 21 世紀にかけての重要なテーマや社会情勢・動向、国際的な作家を中心に、毎年 3〜4 回の展示サイクルで展覧会が企画されている。

写真の普及のための主要な 3 つのメディアである、プリント（作品）、印刷物（写真集）、フィルム（映像）に幅広く多様な形でアクセスできるようになっている。若年層向けの特別プログラムやガイドツアーや、講堂ではシンポジウムや講演会、上映会なども開催し、写真の普及に貢献している。また、併設のパリ市写真保存修復アトリエ（ARCP）は 1983 年に設立され、パリの図書館、公文書館、市立美術館の写真遺産を保護する政策に基づき、フランス国内外の他の遺産管理団体にもサービスを提供している。

DNP とも深く持続的な関わりを持つことになる MEP の運営母体である「パリ・オーディオヴィジュアル」<sup>1</sup>は、1978 年に当時のパリ市長ジャック・シラク(1932-2019)がアンリ・シャピエ(1933-2019)の発案で設立した、写真を中心とした文化政策を展開するための協会である。

1959 年に文化省が設立され、アンドレ・マルロー(1901- 1976)が文化大臣に就任したことがフランスにおける国家と文化政策の密接な関係のひとつの起点とも言えるが、1981 年のフランソワ・ミッテラン(1916- 1996)社会党政権の誕生とジャック・ラング(1939-)文化大臣就任という出来事こそが、現在のフランスの文化政策の礎となったと言える。ラングは「文化」という概念を極めて多様に幅広く捉え、娯楽やサブカルチャーといった産業にまで、支援対象を拡大していった。「文化の大衆化」を促進する一方で、いわゆるハイ・アート、従来の「芸術」の枠を犠牲にすることなく、その保護と支援は変わらず継続させた上で、さらなる裾野を広げるための国家の予算枠を前年度の二倍に増額することで実現させるという大胆な文化改革であり、文化予算が国家予算の 1%を占めるに至った。また、社会党政権が文化改革と同時に行ったのが、地方分権化である。フランスの伝統とも言える中央集権的体制から、各地域における独自の文化を活性化させることを目的とし 1982 年に「地方分権法」を施行し、各地域圏に国家の権限を一部委譲する。それらは文化政策にも大きな影響を及ぼし、地方政治の構造変動が、九二年法の「地域民主主義」改革に至り、より改革的な方向に舵を切ることになる。中央と地方における格差を解消させるとともに、大衆と特権階級、プロとアマチュア、ハイクラスとロークラスといった格差改正がなされた<sup>2</sup>。音楽ジャンルにおいて、クラシックのみならずポップスやロックという領域の拡大とそれに伴う若手支援や団体援助、漫画（バンドデシネ）

---

<sup>1</sup> 1978 年に Jean-Luc Monterosso、Henry Chapier、Marcel Landowski、Francis Balagna によって設立。

<sup>2</sup> ラングによる文化政策においては、支援対象のジャンルの多様化というのが最大の特色の一つである。しかしながら、その政策方針とは異なる、ある意味伝統的とも言える「モニュメント建設」という政策がミッテラン大統領によって大々的に実施された。大統領統括によるパリ大改造ともいえる建築計画「グラン・プロジェ」である。全 9 箇所の建設・改造プランのうちグラン・ダルシュ（新凱旋門）と大蔵省建設以外のプランはすべて文化的な施設・建設物が占めるというまさに国を挙げての文化公共事業と呼べるプロジェクトであった。

「国際漫画フェスティバル」の開催や「国立フランス漫画イメージセンター（Centre national de la bande dessinée et de l'image）」設立、広告ジャンルでは「パリ広告美術館(Musée de la Publicité, Paris)」設立など多岐にわたるが、その一環として写真文化を芸術と見なした様々な取り組みが本格化されたのである。

1980年、パリ・オーディオヴィジュアルは、パリ市内の美術館やギャラリーなどの各会場で、2年に1度、11月の1カ月間に100あまりの写真展を開催する写真ビエンナーレ「パリ写真月間(Le Mois de la Photo à Paris)」を開始した。そのディレクターが当時まだ30代のジャン＝リュック・モンテロッソ(1947-)であった。フランスと写真芸術という歴史的にも深いかわりのある文化を改めて国家的な戦略として打ち立てるということ、さらに彼らの構想は、そのフェスティバルを起点に、写真美術館を設立するというビジョンがあり、それが1996年にMEPという施設で具現化したのである。同協会の活動は上記の「写真月間」を通してフランスと国外の写真家の作品を紹介し、マーケットにおいて取り扱うことによる写真文化の振興と促進、国際交流を活性化させる目的および美術館構想のほか、業界支援および「ラ・リシェルシェ・フォトグラフィク(La Recherche Photographique)」<sup>3</sup>という写真専門誌の発行など、写真文化の基盤整備が多岐にわたり展開されたのである。

## 2.1 大日本印刷のメセナ活動<sup>4</sup>

大日本印刷（以下DNP）における文化活動の歴史は、1986年 ggg（ギンザ・グラフィック・ギャラリー、3つのgの頭文字から「スリー・ジー（ggg）」の愛称で親しまれている）の開設に遡る。1979年、DNPでは北島義俊が社長に、北島織衛が会長に就任した。1980年代はオイルショックを契機に、日本における経済構造が重厚長大（重化学工業の産業）から、機械・電気製品が、軽量・小型化する軽薄短小へと大きく移行した時代である。サービス産業の発展とともにコンビニエンスストアやチェーンストアビジネスが拡大し、そこに並ぶ商品のパッケージや販売促進の需要が激増し、それに伴うCM、グラフィックデザインやコピーなどの広告産業が大きく発展した。さらにPCやCDプレイヤー、ビデオデッキなどが普及し、情報、通信、デザイン産業が勢いづいた時代でもあった。そんな業界動向の中で、1986年、DNPの創業の地であり、画廊のメッカでもある銀座に、昭和初期に建造されたDNPの活字販売所を改装してオープンした ggg は、初代監修者である田中一光(1930-2002)と北島義俊の発案で実現された。世界的に見ても珍しい商業印刷物のグラフィックデザインの専門ギャラリーとして個人デザイナーの仕事を紹介し、印刷とデザインの関係性と重要性を提示しながら、デザインとの出会いと人々の交流を促進する場所である。

1990年代初め、バブル経済が崩壊し日本経済は低迷期に入る。また、ITが社会的に重要なインフラの一つとなり、情報の送受信やコミュニケーションのあり方におけるパラダイムシフトが訪れる。この時期にDNPが掲げたのは「情報コミュニケーション産業」であり、いち早くその変化に沿った商品やサービスの提案・提供を目指しながら、インターネットなどのソリ

---

<sup>3</sup> 1986年に創刊後2回刊行、1997年まで継続し発行は累計20号を数えた。

<sup>4</sup> DNP沿革については以下を参照

<https://www.dnp.co.jp/corporate/information/history/index.html>

ューション型の事業に注力する。社会的な動向として、企業の社会・文化貢献といった側面が重要視されるようになり、様々な企業の文化活動が盛んになる。DNP は 1986 年開設の ggg を起点とし、ddd ギャラリー（1991 年に大阪で開設、2014 年に京都へ移転）、CCGA 現代グラフィックアートセンター（1995 年、福島県須賀川市に開館、2022 年展示事業終了） など、各地に グラフィックデザインの拠点を展開した。（※いずれも 2008 年からは公益財団法人 DNP 文化振興財団が運営）

ggg によってスタートした DNP の文化活動は、現在、グラフィックデザイン・アートの振興を趣旨とする DNP 文化振興財団と、DNP 本体の文化活動部門である ICC 本部という、二つの組織によって担われている。同社のおもなメセナ活動を下記にまとめた<sup>5</sup>。

#### ■ ggg, ddd, CCGA

ggg、ddd は上記のとおりグラフィックデザイン専門のギャラリー。デザイナー田中一光がオープンから 2002 年まで監修を務める。ggg、ddd 共に展覧会（個展・団体展）企画の運営管理費に関しては DNP がすべて負担し、100%メセナの形体をとる。

CCGA は 1974 年に設立された版画工房タイラーグラフィックス（アメリカ・ニューヨーク）の作品を中心に現代版画、グラフィックアート作品を収集する他、シンポジウムやレクチャーなどのイベントを開催。

#### ■ MMM

2002 年 Maison des Musées de France(メゾン・デ・ミュゼ・ド・フランス)開店、後に Maison des Musées du Monde(メゾン・デ・ミュゼ・ドゥ・モンド) に名称変更。

銀座アネックスビルに 2002 年 11 月にプレ、2003 年 2 月に正式オープン。1F、2F はブティック、地下はライブラリー。

DNP は 99 年から RMN(フランス国立美術館連合)傘下の美術館・博物館の所蔵するコレクションのアーカイブ・データベース化に着手。RMN イメージアーカイブセンターが設立され、作品を商品化した。メゾン・デ・ミュゼ・ド・フランス（ドゥ・モンド）ではフランスをはじめ世界の美術館・博物館のコレクション・展覧会についての情報提供や、出版物・ミュージアムグッズの販売など、世界の芸術文化に触れるきっかけを創出する場所として運営。

#### ■ artscape

1996 年発足の artscape は MIJ(Museum Information Japan)と nmp(network museum & magazine project)が統合して制作されたウェブサイトで、全国の美術館の情報を収集・発信・アーカイブしている。アートアーカイブのコンテンツは、「アートライブラリー」（美術用語

---

<sup>5</sup> 下記記事を参照

DNP アート&カルチャー

<https://www.dnp.co.jp/corporate/culture/art-culture/>

Culture Power 大日本印刷 ICC 本部

<http://apm.musabi.ac.jp/imsc/cp/menu/mecenat/dnp/data.html>

集、美術館・ギャラリーデータベース)というデータベース、「展覧会情報」、「アートレポート」、ジャーナリストによる展覧会レビュー、また学芸員や研究者によるレポートなどの発信という両軸が目指されており、アート関係者はじめ幅広い層に活用されている。

#### ■DNP ミュージアムラボ

ミュージアムのコレクションの公開にともなう、様々な課題の解決方法を、パートナーのミュージアムと協働して研究し、DNP の技術やノウハウ、リソースを活用しながら、人々と多種多様な文化芸術との出会いがより一層豊かになる方法を開発・公開するプロジェクト型の文化活動である。2006 年ルーヴル美術館を皮切りに、フランス国立図書館、フィンランド国立アテネウム美術館、スウェーデン国立美術館をはじめ、国内外のミュージアムとパートナーシップを展開している。

## 2.2 DNP 寄贈コレクション<sup>6</sup>

1992 年、DNP は当時の社長 北島義俊の強い意向と信念の元、1950 年代初頭から 2000 年にかけての日本写真史の系譜をたどるコレクションを、MEP に寄贈することを決断する。1 で述べてきた DNP の文化活動の中でも、作品寄贈という形態は非常に特殊なケースであるという。しかしこのメセナ活動は、単に MEP からのオファーがあり、DNP がそれに応える形で寄贈を行ったというものではなく、DNP という会社が事業領域を新規開拓していく機運とともに、当時のフランス、パリにおける写真業界やフランスの文化行政における写真の位置付け、90 年当時の日本の写真界や写真を取り巻く状況、といった要素が言わば三つ巴という形で実現したものである。

前章で述べた通り、フランスのミッテラン政権下では、ジャック・ラング文化大臣のもとパリ市にシラク市長が登場し、文化に対して大きく投資をしようという潮流が 80 年代から生まれていた。1980 年代末、「パリ・オーディオヴィジュエル」はパリ市に、1950 年代以降の国際写真に関する写真コレクション、ライブラリー、ビデオライブラリーを集めた美術館「Maison Européenne de la Photographie (MEP)」の設立を提案。MEP が戦後の写真に焦点を当てたのは、当時、フランスの公的コレクションにこの時期の写真が少なかったというのが理由である。目指したのは 1950 年代から今日までの写真を集めた国際的なコレクションであり、戦後の日本写真も、もちろん含まれることになった。

日本写真を収集するにあたり、コーディネーターとしてフランス側が推薦したのが、当時 GIP という写真のエージェンシーを経営していた倉持悟郎・和江夫妻のうち妻の和江である。写真エージェンシーとしての GIP の特徴は、国外における芸術性の高い写真を日本に紹介してきたところにある。倉持和江がフランス・パリに拠点を置いており、それらの業務の多くを担っていた。彼女はもともと写真の専門ではなかったが、美術を学ぶため渡仏し、結婚後に夫の仕事である写真業界の仕事に携わるようになる。フランスのアートの動向を日本の雑誌に寄稿

---

<sup>6</sup> この章の記述は 2022 年 11 月 7 日（月）のインタビュー内容を元としている。

する仕事をするうちに、写真の著作権処理業務を手伝うようになり、そこで写真業界における多くのコネクションが形成され、モンテロッソとの関係も構築されたという経緯がある。そんな中で、1986年にポンピドゥ・センターで「日本前衛芸術（Japon des Avant Gardes）1910-1970」展<sup>7</sup>が開催されるなど当時フランスには大きな「日本ブーム」の流れがあった。そういった背景と前述の写真美術館構想の中で、日本の戦後写真のコレクションという柱を作りたいという案が浮上する。また、1980年から開催している「パリ写真月間」において、1990年のテーマを「JAPON（日本）」とするにあたり、どのようなラインナップで展開していくべきかという相談がモンテロッソから倉持に持ち込まれる。1990年の「写真月間」における2つの主要展覧会が、DNPの協力を得て、倉持が中心となって実現し、大きな成功をおさめた。そのひとつ、「日本の広告写真-イメージのもう一つの修辞学（グラン・ダルシュ/ラ・デファンス）」は、写真業界と深い関係があり、かつ1986年にgggを始動していたDNPの尽力が極めて大きかった。フランス、日本双方の関係者が、写真月間の成功体験を共有する中、フランスで日本写真のコレクション形成を行うのであれば、日本のメセナのもとで行うのが良いのではという倉持夫妻の考えから、DNPに作品寄贈の打診があったというのが最初のきっかけであった。

当時のDNPの状況を振り返ると、印刷業としてパッケージや商業印刷物、壁紙というように印刷物の量や種類を増やしていくというところから、これからは「情報加工産業」という企業としてのスタンスをまさに打ち出していた時期であった。北島の社長就任後、1980年代に印刷業界の国際会議という場で今後の印刷業について発言するという機会が何度かあり、そこで「マルチメディア（複合的情報媒体）」というキーワードが頻繁に多岐に渡って出てくるようになった。そして、それらの情報媒体は、提供者ではなく実際に利用するユーザーの目線に立って便利に活用されるものであるべきであり、そしてそれに伴い提供する情報の質を高めていくということに印刷会社としてコミットしていくべきであるという趣旨の「情報加工産業のリーディングカンパニー」としての姿勢を打ち出していたのが80年代後半～90年代頭であった。1986年にgggがスタートし、1991年DNPとしての「新しい情報文化を考え、形づくる受発信基地」として「DNP銀座ビル」がリニューアルオープン、同時に文化活動の専任部署としてICC本部（インフォメーションコミュニケーションセンター）が新設され、いかに情報を受発信していくかという重要性が社内外に着実に認知されていく。単にハードとしてのギャラリーやショールームを設けるだけではなく、ソフトの充実を図ることの必然性、コンテンツの質を高めていくための研究活動などが社内的に認知されて予算が付いていることなどからも会社としての文化に対する意識と姿勢がうかがえる。90年代、日本ではバブルが崩壊し、厳しい経営状況に陥った企業も少なくなかった。DNPはその時期においても経営の揺れというもの比較的少なかったこともあり、文化や社会貢献に対する予算を確保し、gggのオープンからの熱気のある勢いの流れで文化活動を継続してきたことは重要な点である。

このプロジェクトの意義を改めて考察すると、第一次の寄贈計画が予定通りに実施されただけでももちろん十分な成果であり意義のある実績である。が、このコレクションの価値をさら

---

<sup>7</sup> Japon des avant-gardes 1910-1970 1986年12月11日～1987年3月2日 国立近代美術館（ポンピドゥ・センター）

に高めているのは、第一次の寄贈計画に留まらず、第二次の寄贈計画、つまり戦後日本写真の全盛期を築いた巨匠たちの代表的な作品群から現代に続く系譜をこのコレクションによって一望できるラインナップを形成したことである。このプロジェクトは、「パリ写真月間」の協力から MEP への作品寄贈までのほとんどが、当時社長の北島の意向を受け、役員の高橋平のリーダーシップのもとで推進された。90 年の「パリ写真月間」を端緒とすれば、およそ 20 年に亘って、プロジェクトは枠組の強度を保ち続け、社内の担当部署を移しながらも、着実にバトンが引き継がれていった。高橋は、DNP の文化領域における活動を、ビジネス、メセナの両面から統括していた人物である。今回のプロジェクトにおけるフランス側のキーパーソンであるモンテロッソとのやりとりを担っていた倉持と高橋の間には信頼関係に基づいた連携と確かなコミュニケーションがあった。美術館におけるコレクションの形とはいかにあるべきかを考察し、一時的で短絡的な活動ではなく、継続的に計画的に形成していくべきものであるとの方針に至っている<sup>8</sup>。また、パリの写真月間におけるメセナのあり方は、MEP・パリ・オーディオヴィジュアル、そして DNP の両者にとって非常に良い形で成功と実績となった。DNP においてもそういった場所で日本企業がメセナ活動として貢献することの重要性が再認識され、MEP の新しい構想に対して、企業メセナとしての協力を決定する。それにあたり、「良質のコンテンツ」ということを念頭においてそういった写真のラインナップを寄贈していったことが推測できる。企業としてのビジネスという観点はあったはずだが、高橋は「文化貢献の新しい形を考える」ということを常に語っていたという。倉持によれば、実際、経営トップから担当まで、プロジェクトに関わる DNP の各層が、各々の立場から推進力に寄与していたという。社長としてビジネス面での成功はある一方で、印刷業が文化文明を発展させるということが歴史的に継続されてきたことを、北島が会社の代表として繰り返し語ってきたことも影響しているはずである。経営者の理念が、社員一人一人の信念と行動、突破力につながったということが具体的に理解できる事例である。

また、フランスという国の、他国の文化を理解するための素養とそれを受け入れ自国の資産とする戦略的かつ寛容な土壌の豊潤さという点は文化の発展に大きく寄与していると言える。80 年代半ば～90 年代に起きた空前の日本ブームだが、それが一時的なものではなくフランスにおける歴史的な日本文化への理解のプロセスにおいても、例えば東洋の言語学的なアプローチひとつを見ても、単に言葉を学ぶだけではなく、その言語で基本的な論考が出来、哲学的な思考にまでも至れるような学ばせ方を採用している。表面的なブームや一過性の選択ではなく、歴史的な視野と価値基準において、的確な協力体制の構築とコンセンサスの共有がなされたことは大きい。これらのコレクションの内容が今現在において、日本側から見てもフランス側から見てもレベルの高い、満足のいくラインナップになっているという事実は、フランス人の深い日本文化への理解度に支えられていると考えることもできる。

90 年代における写真文化の振興という観点から、フランスと日本（正確にはパリ市と東京）との関係性、およびパリ写真月間への DNP の関わりから MEP 開館までの経緯を改めて時系

---

<sup>8</sup> 当時開館準備期間であった東京都写真美術館に、凸版印刷株式会社が大規模の作品寄贈をした実績が、美術館におけるコレクションの継続的な形成と企業メセナとしての関わりについて何らかの影響を与えた可能性はある。



列化すると下記のようなになる<sup>9</sup>。

当初からフランスの日本への関心は非常に高く、またパリ市と東京は 1982 年に姉妹都市となったことも両都市の関係構築に良い影響をもたらしたと言える。

1990 年 6 月 東京都写真美術館（第一次施設）開館

1990 年 11 月「パリ写真月間」

○日本写真がテーマの一つ。※DNP との連携スタート

○公式カタログで告知広告【参考図版 1】

○DNP のメセナ協力のもと以下 2 つの展示会を開催。

-*La photographie publicitaire japonaise une autre rhétorique de l'image*, à la Grande arche de la défense

日本の広告写真-イメージのもう一つの修辞学（グラン・ダルシュ/ラ・デファンス）【参考図版 2】

-*La photographie japonaise de l'entre-deux-guerres du pictorialisme au modernisme*, Mission du Patrimoine photographique, Palais de Tokyo

第二次世界大戦間の日本の写真、ピクトリアリズムからモダニズムへ（写真文化遺産委員会 /パレ・ド・トーキョー）【参考図版 3】

●パリ写真月間の一環として、パリ・オーディヴィジュエルは東京都写真美術館が制作した 2 つの展示会を開催。

-*La photographie contemporaine Japonaise, 12 points de vue*, Pavillon des Arts

日本のコンテンポラリー 写真をめぐる 12 の指標（パビリオン・デ・ザール）

-*Tokyo a City Perspective*, à la mairie du XVI<sup>ème</sup> arrondissement

東京 都市の視点（16 区市庁舎）

1992 年 11 月 「パリ写真月間」

公式カタログで告知広告【参考図版 4】

1992 年 Recherche PHOTOGRAPHIE Japon 日本特集 【参考図版 5】

1992 年 12 月 東京・パリ友好都市提携 10 周年記念事業「フランス写真の新たな展開 1980ー90 パリ市・ヨーロッパ写真館コレクションから」展（東京都写真美術館第一次施設）

※12 月 18 日 関連事業としてジャン＝リュック・モンテロッソによる講演会とレクチャー実施

---

<sup>9</sup> DNP および MEP へのインタビュー内容を元に追記した。

1994 年 （公式記録）DNP 寄贈開始<sup>10</sup>

1995 年 1 月 東京都写真美術館総合開館

1996 年 MEP オープン

## 2.3 DNP 寄贈コレクション

MEP への「DNP 寄贈コレクション」は次の通り実施された（DNP からの提供資料参照）

### ●第 1 次第 1 回 1994 年 3 月寄贈

- 1) 東松照明（とうまつしょうめい） 〈長崎〉シリーズより 40 作品

### ●第 1 次第 2 回 1995 年 3 月寄贈

- 2) 森山大道（もりやまだいどう） 51 作品  
3) 荒木経惟（あらきのぶよし） 作品集『センチメンタルな旅／冬の旅』より 50 作品

### ●第 1 次第 3 回 1996 年 2 月寄贈

- 4) 奈良原一高（ならはらいつこう） 作品集『人間の土地』『静止した時間』『消滅した時間』『禅』『ジャパネスク』『ヴェネチアの夜』より 15 作品  
5) 細江英公（ほそえいこう） 作品集『おとこと女』『薔薇刑』『鎌鼬（かまいたち）』『抱擁』より 15 作品  
6) 深瀬昌久（ふかせまさひさ） 作品集『鴉』より 6 作品

### ●第 1 次第 4 回 1997 年 3 月寄贈

- 7) 土田ヒロミ（つちだひろみ） 〈ヒロシマ〉シリーズより 98 作品  
8) 杉本博司（すぎもとひろし） 〈劇場〉シリーズより 4 作品  
9) 柴田敏雄（しばたとしお） 〈トポロジー〉シリーズより 5 作品  
10) 山崎博（やまざきひろし） 〈オブザベーション〉シリーズより 24 作品

### ●第 1 次第 5 回 1998 年 12 月寄贈

- 11) 森村泰昌（もりむらやすまさ） 〈美術史〉シリーズ他より 4 作品

---

<sup>10</sup>DNP として最初に「パリ写真月間」に協賛として関わるのが 1990 年。実際に公式な形で MEP への作品寄贈が開始されたのは 1994 年と記録にはあるが、1992 年のパリ写真月間のカタログには、「日本に関する新しいコレクションが 5 年計画で MEP に入ります」といった趣旨で、東松、荒木、森山といった実際にコレクションに入っている作品の掲載とともに、今後 5 年間の寄贈計画の告知が行われている。

●第2次第1回 1999年8月寄贈

- 12) 畠山直哉（はたけやまなおや） 〈ライムワークス〉シリーズ他より17作品  
13) 宮本隆司（みやもと りゅうじ） 〈地獄の黙示録〉シリーズ他より35作品

●第2次第2回 1999年12月寄贈

- 14) HIRO（ひろ） 《Betta Splendens, New York, 1981-1984》24作品

●第2次第3回

2001年12月寄贈

- 15) 田原桂一（たはらけいいち） 〈Visagéité（顔貌）〉シリーズより84作品

2003年8月寄贈

- 16) 木村伊兵衛（きむらいへえ） 〈秋田〉シリーズより11作品

●第2次第4回 2005年9月寄贈

- 17) 植田正治（うえだしょうじ） 〈砂丘〉シリーズより13作品  
18) 松江泰治（まつえたいじ） 作品集『gazetter』他より14作品

●第2次第5回

2006年1月寄贈

- 19) 古屋誠一（ふるやせいいち） 作品集『Christine Furuya-Gossler, Memoires, 1978-1985』  
他より12作品

2006年3月寄贈

- 20) 石内都（いしうちみやこ） 〈キズアト〉 〈Mothers〉シリーズより6作品  
21) 石元泰博（いしもとやすひろ） 〈シカゴ〉シリーズより12作品  
計540作品

### 3. MEPにおける「DNP 寄贈コレクション」の位置づけと展開<sup>11</sup>

MEPにおいて「DNP 寄贈コレクション」は戦後の写真史という観点からも重要な位置を占めている。作家及び作品の選定は的確であり、その歴史的および現在における価値に対するMEP内の評価は非常に高い。このコレクションによって、MEPはヨーロッパにおける日本写真のリファレンスポイントとなっている。このコレクションを礎に、MEPは日本の写真コレクションをさらに充実させ続けることで、ヨーロッパにおける日本写真の中心的存在である状態を維持したいとの意向は変わらないという。

MEPの日本写真のコレクションの点数は現在980点であり、その中でDNPの寄贈である「DNP 寄贈コレクション」は540点<sup>12</sup>、起点となった同コレクションが、その後の展開と現在

---

<sup>11</sup> この章についてはパスカル・オーエル氏へのインタビューを参照

<sup>12</sup> 2022年12月現在。

の状況を形作ったとも言え、いかに大規模で重要なメセナ活動であったかがわかる。また、同コレクションのラインナップに関しても、写真史上の主要シリーズであり、写真家、取得作品ともに優れた選択であったとの評価は変わらない、それどころか市場価値、研究価値という両軸において、当時の価値をはるかに上回る評価となっている。ラインナップに入っている写真家の多くは、過去 30 年の間にヨーロッパでも高い知名度を獲得しており、同コレクションは研究者にとっての貴重な参考資料となっている。現在のフランスにおいて、荒木経惟(1940-)や森山大道(1938-)といった写真家は多くの人々に知られているが、彼らの作品はフランス国内の他の美術館やフェスティバルで展示されることはあるものの、美術館のコレクションに入っていることは多くはない。そういった意味でも、永久的な収蔵品として戦後日本写真の代表的な写真家のコレクションを所有している MEP は、フランスにおける日本写真の研究における中心であることに変わりはないのである。作品の選定において重要な役割を果たした倉持和江は、MEP の開館に先立ち、MEP の図書館のために日本の写真集 1,000 冊のコレクションを構築し、フランスで最も重要な日本の写真集のコレクションにも多大な貢献をしている。

MEP は「DNP 寄贈コレクション」を何度も展示することで有効に活用し、ヨーロッパにおける日本の写真の普及に貢献してきた。別紙には、それらが展示として活用された履歴一覧を記した。なかでも、前述の 2017 年の展覧会は、350 点という過去最大規模でこれらのコレクションを一堂に展示した展覧会となった。同展は、MEP の設立および同コレクションの収集に関しての多くを担ったジャン＝リュック・モンテロッソの館長退官記念としての企画でもあった。この展覧会には 26,500 人の来場者があり、ヨーロッパの様々な美術館の学芸員、施設の責任者、美術評論家など、写真関係者の間での評価も高く大成功を収め、その類まれなコレクションが賞賛された。同コレクションは、現在、ヨーロッパ全域でその価値と意義を認められており、2017 年の同展覧会は 2018 年にはモスクワ巡回もなされた。

MEP のコレクションと活動はフランス、ヨーロッパにおける戦後日本写真の認知および価値を向上、普及に多大な貢献をしており、「DNP 寄贈コレクション」がその礎となったことは言うまでもない。

※MEP におけるコレクションの活用履歴は別紙参照。

#### 4. おわりに

日本、特に戦後の写真文化は国外においても一定の高い評価を受けてきた。特に 1990 年代以降、日本の写真家への関心と認知度は一気に高まった。研究対象としての重要性はもちろん、マーケットにおける価値や需要もあり、美術館やギャラリーにおいて専門家によるキュレーションで日本写真家の個展やグループ展は定期的に開催されている。しかしながら、肝心の日本国内において、ほとんどの美術館において写真は作品として扱われているが、写真史を体系的に網羅したコレクションを所有する美術館は、写真専門の美術館と写真専門部門を有するいくつかの美術館以外にはほとんどないのが現状である。写真が現代アート化し、美術史の文脈の中で写真史が軽視されることも少なくない中で、今こそ、日本写真史を体系的に見ることができるこれらのコレクションの収蔵経緯と、そこに多大な貢献をしたメセナの在り方を認識

することは重要な行為である。

また、この活動は現在では継続されていない活動ではあるが、メセナの歴史においてはもちろん、フランスそして日本写真史において非常に意義のある功績であり、またその価値が現在においてますます高まっていることは大変重要な点である。また、国家として他国の文化を尊重し、長期的な視野でそれらを自国に還元される文化遺産として活用することに戦略的に投資していくフランスの文化政策には大いに学ぶところがあると思える。

この寄贈がはじまった 1990 年代と言え、日本においてはようやく写真が「アート」としての認知を得つつある時代であり、1990 年に東京都写真美術館一次施設が開館し（総合開館は 1995 年）、美術館という概念においても日本において写真をどのように扱っていくかの方向性と位置づけがようやく形を成してきた頃である。また、美術館や大学という組織を中心に業界構成がなされている美術界とは異なり、特に戦後における写真界の動向は、民間のカメラ・フィルムメーカーや出版社などが写真家の活動を支え、作品の発表の場を提供してきたという経緯がある<sup>13</sup>。日本の写真界にメセナ活動が貢献した多岐にわたる功績は計り知れないが、それらの歴史や活動の意義がアーカイブとして残ることなく、現在において継承されていないことはもどかしい。

時代の変化と共にメセナ活動の定義は幅広くなり、広義的にはメセナを謳いながら、目的がビジネスと直結した一時的な広報やプロモーション要素の強い内容となっている活動も見受けられる。新しい多様な文化への関わり方や多くの接点を創出することももちろん大切なことだが、変革すべき部分と守るべき部分の見極めは非常に重要である。写真ほど時代とともに劇的な変化を遂げてきたメディアは少ない。世界における日本の立場も変わりつつある中で、時代に合わせて変化していく部分と、時流に左右されない長期的なビジョンを持って文化を守り、継承していくことで貢献していく二本柱が必要とされている。メセナのより本質的な意味と長期的視野をもって活動が一定期間継続された実績について、今改めてその価値と意義を再認識することは重要だと思われる。近年メディアや人々の情報のやりとりの在り方の変化はさらなる加速度を増し、歴史を顧みることや長期的な未来の展望を思考する余裕がない状況の中で、ただ現在における短絡的な価値基準が優先されてしまう傾向も見受けられる。そういった土壌においては、文化は短いスパンでの生産と消費を繰り返すしかなく、新たな可能性が育成や醸成されることなく消滅してしまう。長期的ビジョンの確立に欠かせないことは歴史を学び現在と未来に生かすことである。先人たちが積み重ねてきた文化の歴史を今一度振り返ることで、現在の状況において何を継承し、何を改革していくかが自ずと見えてくるはずだ。企業メセナの在り方においても、求められる姿勢は同じではないだろうか。将来を見据え長期的視野で文化を蓄積していくことの重要性と、新たな概念と方法で未来につながる可能性を切り開いていくことの両立の意義を、今回取り上げた「大日本印刷寄贈コレクション」の事例によって改めて認識し、それらの知見を今後に生かすことができることを願ってやまない。

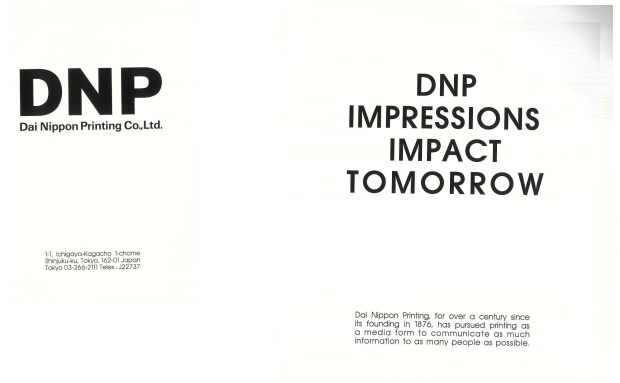
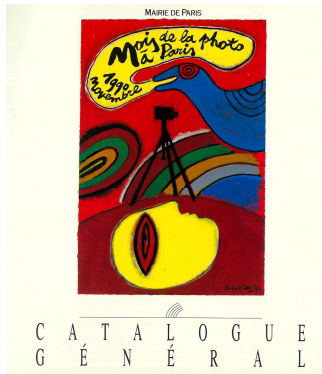
---

<sup>13</sup> 昨年度（2021 年度）、メセナアソシエイトレポート「戦後日本写真の振興に企業メセナが果たしてきた役割―株式会社ニコンと富士フイルム株式会社の事例から」で取り上げた。

(参考図版)

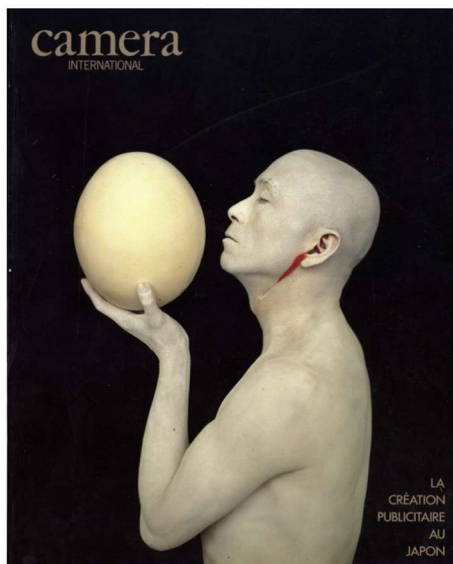
【図版 1】

1990 年「パリ写真月間」公式カタログ（左）DNP による告知広告（右）



【図版 2】

*La photographie publicitaire japonaise une autre rhétorique de l'image, à la Grande arche de la défense*  
日本の広告写真・イメージのもう一つの修辞学（グラン・ダルシュラ・デファンス）



camera international no.0 winter 90 (展覧会の公式カタログ)

【図版 3】

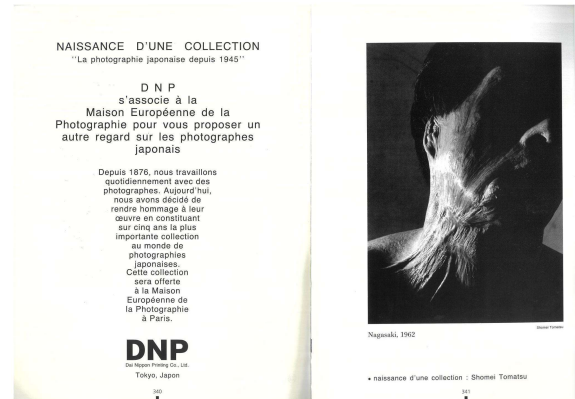
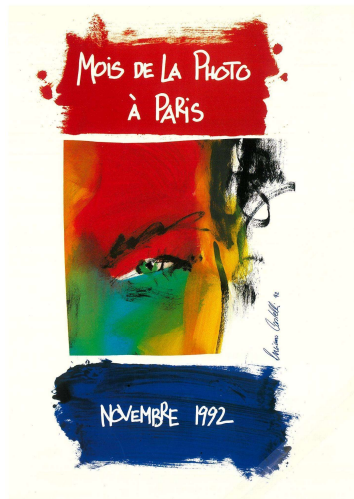
*La photographie japonaise de l'entre-deux-guerres du pictorialisme au modernisme, Mission du Patrimoine photographique, Palais de Tokyo*  
第二次世界大戦間の日本の写真、ビクトリアリズムからモダニズムへ  
(写真文化遺産委員会/パレ・ド・トーキョー)



展覧会カタログ

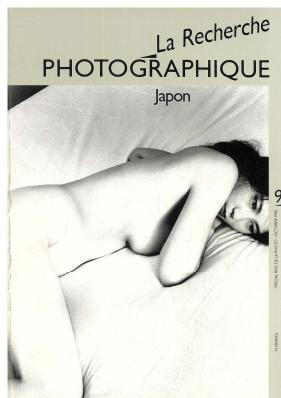
【図版 4】

1992 年「パリ写真月間」公式カタログ（左）DNP による告知広告（右）



【図版 5】

1992 年 La Recherche Photographique 日本特集



Japon 日本特集

掲載されている写真家のほとんどがコレクションに含まれている

別紙 1

MEP による「DNP 寄贈コレクション」の展覧会実績（MEP からの提供資料参照）

**Liste des expositions de la donation Dai Nippon Printing Co :**

「DNP 寄贈コレクション」展示歴

**A la MEP :** （MEP 館内における展示）

Lors de l'inauguration de la MEP une salle était consacrée à la Donation Dai Nippon, avec Araki, Moriyama et Tomatsu  
22 février - 31 mars 1996.

MEP のオープニングでは「DNP 寄贈コレクション」のための展示室が用意され、荒木、森山、東松の 3 人の作品が展示された。

“Une aventure contemporaine, la photographie 1955-1995”  
Shomei Tomatsu et Nobuyoshi Araki  
17 avril - 16 juin 1996

« La collection Dai Nippon Printing Co., Ltd , donation 1997 »:  
Toshio Shibata, Hiromi Tsuchida et Hiroshi Sugimoto  
19 décembre 1997 au 17 mai 1998

« La collection Dai Nippon Printing Co.Ltd »:  
Naoka Hatakeyama,  
24 février – 3 avril 2000

« La collection Dai Nippon Printing Co., Ltd » :  
Ihei Kimura et Keiichi Tahara  
16 juin – 5 septembre 2004

« Mémoire et lumière, Photographie japonaise 1995-2000 »  
28 juin – 27 août 2017

Toute la MEP était consacrée à la présentation de la donation avec les 21 artistes.

Cette exposition a rassemblé 26 500 visiteurs. Elle a eu un très grand succès auprès du public, notamment des professionnels de la photographie : conservateur de musées européens, directeur



d'institutions, critiques d'art qui ont tous salué une collection exceptionnelle. La collection Dai Nippon de la MEP est aujourd'hui reconnue en Europe.

Une grande partie de cette collection a également été exposées lors des Rencontres d'Arles 2015 et elle est maintenant mondialement connue.

« Love Songs, photographies de l'intimité »

Nobuyoshi Araki

30 mars – 21 août 2022

### **Exposition Hors les murs : (MEP 館外における展示)**

Shomei Tomatsu, Nagasaki

Salle «Novy Manège», Moscou, Russie

15 mai – 15 juin 2000

“Japon 1949-1975, un renouveau photographique”

Hôtel de Sully, Paris

3 avril - 15 juin 2003

“*Nippon Kobo, 13 photographes de la collection de la MEP / Donation Dai Nippon Printing*”

FORMA Centro Internazionale della Fotografia, Milan

2 juin - 6 septembre 2009

“Un demi-siècle de photographie japonaise dans les collections de la MEP”

Salon de la Photo, Paris, Porte de Versailles

5 au 9 novembre 2015

Rencontres d'Arles 2015 :

“Ensembles, la photographie, quand la MEP collectionne”

Chapelle Saint Martin du Méjan, Arles, France

6 juillet - 30 août 2015

Araki, Hiro, Ishiuchi, Ishimoto, Hatakeyama, Moriyama, Shibata, Sugimoto, Tomatsu, Ueda

“Nobuyoshi Araki 1965 - 2016”

Musée national des arts asiatiques Guimet, Paris

13 avril - 5 septembre 2016

“Mémoire et lumière, Photographie japonaise, 1950 - 2000

La donation Dai Nippon Printing Co., Ltd.”

Multimedia Art Museum, Moscou, Russie

5 avril - 3 juin 2018

## 別紙2 MEPによる「DNP 寄贈コレクション」以外の日本写真の展覧会実績

La MEP a également présenté des expositions rétrospectives de photographes japonais dont certains présents dans la collection Dai Nippon, avec des donations importante (Hiro, Narahara) et continue encore aujourd'hui à exposer et défendre la photographie japonaise contemporaine.

Ainsi, en 2021 et 2022, 4 expositions ont été consacrées à des photographes japonais.

また、MEP は、大日本コレクションの一部である日本の写真家の回顧展を、重要な寄贈（ヒロ、奈良原一高）を受けて開催し、日本の現代写真の展示と研究を継続している。

日本の写真家に焦点を当てた展覧会は定期的に開催されている。

### Expositions de photographes japonais à la MEP, hors collection DNP :

Hiro en 2000.

Hiro a offert à la MEP 5 œuvres en 2001

et la Fondation Elsa Peretti 84 œuvres de Hiro en 2008

Ihei Kimura, Paris, en 2004

Ikko Narahara en 2002.

Don de 120 œuvres par Ikko Narahara. Edition d'un livre par la MEP

Shoji Ueda en 2008

Keiichi Tahara en 2014

*TOKYO Moriyama-Tomatsu* en 2021

(exposition présentée au musée Maxxi de Rome en 2022)

Mari Katayama en 2021

Motoyuki Daifu en 2022 :

Acquisition et don de l'ensemble de l'exposition soit 24 tirages

Hideka Tonomura dans l'exposition *Love Songs* en 2022. Acquisition de 24 tirages

## 参考文献

『日本写真の転換 1960 年代の表現』東京都写真美術館、1991 年  
『戦後写真史ノート 写真は何を表現してきたか』飯沢耕太郎、中公新書、1993 年  
『日本写真史（上）幕末維新から高度成長期まで』鳥原学、中公新書、2013 年  
『日本写真史（下）安定成長期から 3・11 後まで』鳥原学、中公新書、2013 年  
『日本写真史 1945-2017』レーナ・フリッチェ著 飯沢幸太郎日本語版監修、青幻舎、2018 年  
『時代を写した写真家 100 人の肖像 上巻』鳥原学、玄光社、2018 年  
『日本現代写真史 1945-95』日本写真家協会編、平凡社、2000 年  
『東京都写真美術館総合開館 20 周年史 一次施設開館から 25 年のあゆみ』公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、2016 年  
Camera INTERNATIONAL 0 WINTER 90「カメラ・インターナショナル日本版 特集 現代日本の広告写真」、朝日出版社、1990

*MEP Maison Européenne de la Photographie ville de Paris*, Achevé d'imprimer sur les presses, Paris, 1996

*Une Collection, Maison Européenne de la Photographie*, Actes Sud, 2015

*Catalogue du Mois de la photo 90.*, Paris Audiovisuel, Paris, 1990

*Catalogue du Mois de la photo 90.*, Paris Audiovisuel, Paris, 1992

*La Recherche Photographique*, Paris Audiovisuel, Paris, 1990

DNP 大日本印刷株式会社

沿革 <https://www.dnp.co.jp/corporate/information/history/index.html>

アート & カルチャー <https://www.dnp.co.jp/corporate/culture/art-culture/>

artscape [https://artscape.jp/report/topics/10123499\\_4278.html](https://artscape.jp/report/topics/10123499_4278.html)

多様な「日本写真」の水脈を一望する——ヨーロッパ写真館「記憶と光 日本の写真 1950-2000 大日本印刷寄贈コレクションより」（飯沢幸太郎） [https://artscape.jp/report/topics/10136798\\_4278.html](https://artscape.jp/report/topics/10136798_4278.html)

現代日本写真が伝える眼差しの方法——「記憶と光 日本の写真 1950-2000 パリ・ヨーロッパ写真館所蔵 大日本印刷寄贈コレクションより」モスクワ展（鈴木佑也） [https://artscape.jp/report/topics/10146545\\_4278.html](https://artscape.jp/report/topics/10146545_4278.html)

Culture Power <http://apm.musabi.ac.jp/imsc/cp/menu/mecenat/dnp/data.html>

国際交流基金 [https://performingarts.jp/jpf.go.jp/J/overview\\_pre/0502/1.html](https://performingarts.jp/jpf.go.jp/J/overview_pre/0502/1.html)